

壹鬼怒は着物の気持ち

うう……ううう。痛いよお。帰りたいよう。

私……ここで……殺されちゃうのかな。やだよお……しにたくない……。

ぐすっ……なんで、なんでこんな事につ……。

あの時、のんびり明太おにぎりなんて食べていなければっ……。

あう……おなか、すいた。甘海老……あと、アジ……ひかりもの……、

えんがわ……は白身か……。

「お待ちしておりました、先生。どうぞ、こちらです。

……ええ。先程も暴れ回って、所員数名が軽傷を負いました。

さすがは鬼神の末裔。さながら飢えた獣ですよ。

現在は所員総出で結界を張り、視界を封じてありますが、

こちらからは様子をうかがう事が出来ますし、接触も可能です。

妖専用のマジックミラーとお考えください。

しかし先生、何故奴を生け捕りに……？

そのうえ処分せず監禁など……奴の脅威は貴方もご存知でしょう。

まさか……、いえ、何も。

……先生。申し上げるまでもない事ですが……十分にご注意を。

奴の牙はまだ折れていません。どうかご無事で……」

(戸を開け、独房に入る)

……はっ。誰……？

……ああ、その声は……。ふふ。相も変わらず忌々しい声ね。

ええもちろん。忘れもしないわ。

ああ——痛かったわね……。あの時の一撃。

この私が……鬼の血を継ぐ孤高の妖・可畏孤が、貴方のようなひと如きに……しくじったわ。漸にもまだ貴方のような逸材が残っていたのね。

ククッ。妖との共存をうたいながらも、

実利の為に、ひとも妖もいたぶるどん欲な集団……【漸】。

クハハッ。つい先刻も囁みついてやったわよ。情けない悲鳴を上げて、

なんと無様な事か。彼らったら、群れなければ何も出来ないのかしら。

アハッ。あはははははっ……。はは……。

……今さら、何なのよ。私を嘲笑いにわざわざ来たの……？

見て、この醜態。手枷、足枷、首枷。私を犬とでも言いたいのかしら。

いや、どんな飼い犬だって、手足は自由になっているものね。

犬以下よ……。私はもう何者でもない、漸の所有物になってしまったのよ。

笑えるでしょう？　いくらでも笑いなさいな。

この私が……。

連峰を駆けて、湖のほとりに眠り、弱きを助け悪を屠る……、

そんな日々が当たり前で……それがこの、可畏孤の生きる意味だったの。

弱き妖……幼子もご老体も、口を揃えて「ありがとう」って。

私はその一言の為に努力を惜しまなかったわ。どんな時だってひとりで、

そんな……そんな日々を、貴方は……根こそぎ奪っていったんだ。

……狂人……。

貴方が少しでもまともな頭をしていたら、私の前に立つなんてありえない。

自分の名誉への生贄に……どうして歩み寄れるの？

ねえ。私ね、貴方が憎くて憎くて仕方ないの……。今すぐ殺したいわ。

貴方を殺め、ここから脱走して、私は……私の平穏を、私の当たり前を……

取り戻す……！

……くく、くはっははは……。

分かっているわよ……そんな事は不可能だってね。

それに、そう、そんな大口叩くのも、無意味どころか逆効果よね。

ねえ、その為にここへ来たのでしょうか？　知っているのよ。

さっき見張りの三下どもが談笑してたもの。

「鬼が穢される瞬間を目の当たりに出来る」って。

でも、周囲に反対されたでしょう？ 聞かなくても分かるわよ。

漸の連中が血眼で私を探してたのは知ってるの。

即刻処分されなかったのは奇跡だと思ってるし。

という事は、貴方が無理やり意見を通したのでしょ？

奴らは、貴方が私を拷問する為に緊縛したと勘ぐっていたけれど、

……何をぞ所望かしら。

この着物を取っ払って、誰にも触れさせた事のない肉体を蹂躪する？

穢そうがいたぶろうが殺めようが、誰も貴方に文句はつけない……。

さあ、無慈悲な漸よ。貴方は私をどうしたいの……？

……。震えてなんか、ないわよ。鬼が、こ、これしきの事で……

……ッ……ひっ……！

……。ふえ。……は？

……。あの、意味が……分らない。

お話、したいって？ なにそれ？ なぜ？ どうして？

貴方と話す事なんてひとつもないわ。そんな事ぐらい分かっているでしょう？

その為に私を生きながら捕らえた、とでも言うつもり？

……見えないわ。貴方の顔も、心も……。

狡いわね。貴方は私を見ているのに、私は貴方を……、……。

ふん……。ひとは信用ならない。敏く狡猾な生き物だもの。

……え……。何？ ……着物……？

えっ。こ、これ、何か変……かしら……？ え、え？

あ、確か、ええと、ぶらうす？ だったっけ……？

……だって！ ……あ、……その、ひとの女の子というものは、

こういった格好の者が多いから……買ってみたのだけれど。おかしい……？

えっ、い、いや！ これはあくまで、貴方たち漸の追手から逃れる衣装よ。

私が指名手配の妖であるのは周知の事実でしょう。

木を隠すなら森の中。全てはカモフラージュの為。
決してッ。けっっして！

ひとに憧れてっ、ひとの女の子みたいになりたくて着ているわけではないの。

……違うたら！ 何なのよ、その馬鹿にした言い方！ 違ッ違うもん……！

そうじゃないもん……。カモフラージュだもん……。

ハッ。あ、あああ、あッ、ええい黙れ黙れ黙れ！

ひとの分際で鬼を愚弄しおって、八つ裂きにしてくれる！

……はあ……はあ……。くッ……手を出せぬと知ってこの仕打ち……。

貴方は最低最悪のひとね。もう話す事など何もないわ。去れ！

……さ、去れと言っておろうが！ 見えずともいる事は分かっている！

言葉も通じぬか木偶人形！ いなくなれと言ったのだ！

何が誤解だ。どこにもそんなものはない。

……そう。そうだ。立ち去れ立ち去れ！ もう戻ってくるな！

……、……。

はあッ。何と胸糞悪い。自由を奪うでは飽き足らず私の心まで侮辱するとは！

……。この着物、やつぱり変なのかな……。

式海老で鬼を釣る

ちよつと、もう戻ってくるなって言っただけ……

……ああ、なるほどね。私の処分が決まったって事？

とうとう来たわね。どれほど残酷で悪辣な刑を処されるか見ものだわ。

切り捨て？ それとも五右衛門？ 肉便器？ 一体私に何を……へ？

え、あ、ああ、そう……。

……式神……。という事は、ええとその、貴方の……下僕になる、という事？

え、下僕じゃなくて……？ ……ほう、ほう、相棒……ね。

へえ。ふうん。そうなのね……。

……はあああ……よかった……よかったよ……。私死ななかつた……。

ハッ。じ、じゃなくてっ！

ふんっ。不服だけれど、それも私の運命だったという事ね。甘んじてやるわよ。

……なっ、なによその顔は！ ひよつとして呆れてる！？

無礼なッ。私はっ……、……、いや、これ以上無様を晒すわけには……
うん……いかないわね。仕方ない……ここは負けておくわ。

昨日も言ったかもしれないけれど、鬼神の妖を討伐したのは貴方なんだし、
どんな選択も、文句を垂れる者はいないでしょう。内心は不服だろうけれどね。

……ふふ……♪

あつ。でもひとつだけ言っておく事があるわ。

私の着物に対しての侮辱、失言、あれについて謝罪なさい！

だ、だいたいおかしい話よ。なぜ妖がひとの着物を身に着けてはいけないの？

和装も洋装もひとの衣服でしょう。それを否定するだなんて、

私たちに裸で過ごさせて言うの？

勝手なイメージで「妖は和服を」なんて言わないでちょうだい。

そもそも！ 貴方は他人の服装について、とやかく言える立場なの！？

まず鏡を見てご覧なさいな。誰もが認める瀟洒な出で立ちをしている、

だなんて……自信持って宣えるの？

……ふん。それでいいのよ。私たちだって……現代に生きているのよ。

……少しは……おしゃれとか……してみたいもん。

ん、何でもないわ。

ともかく貴方の認識不足を正せたという事で、今回は良しとしましょう。

……で、どう？

何がって、貴方……、どうって、そのままの意味に決まってるでしょう。

……くうううッ……この愚か者がッ……亀の歩みの如し鈍き男ね……！

だ、だからっ。この……恰好……貴方はどう思う……って、……。

にあってるよ、とか……きれいだね、とか……。

ううううッやっぱ良い！ 聞きたくない！ 何も言わなくて良いわ！

はっ！？ か、かわ、か、かわ……い……すぎる？？？

へあッ？！ な、何だそればッ——なあにが可愛いすぎるだ！？

なあにが抱きしめてナデナデだ！？ 気持ち悪い！ 新手の呪いか何か！？

きさッ貴様はツアレだ、アレ！ 馬鹿！ ばーかばーか！ 死ね馬鹿！

なッ——だ、黙れ黙れ黙れッ！ ばあああああああああああか！

うああああ。屈辱、屈辱う！ 私ともあろう者が、ひと如きにこんなああ。
貴方とはッ……ここでまた決着をつける必要があるわ……！

鬼神・可畏狐の真髓、この高名は伊達ではない事、とくと味わせてや——

……は？ ……コミュニケーション……？

……ああ。うう……ん……。

まあ……従えた妖との交流が大事、というのは分かるわよ。

でもこんな……いきなり詰め過ぎなのよ距離を。

何が抱きしめてナデナデよ。妖もひとでもドン引きするに決まってるでしょ。

良い？ 順序ってもんがあるのよ。ほら例えば、えーと何だろ……その……。

あー、あれよ、あれ。……あれって、分からないの？ 鈍感ねえ、もう。

……あッ。

あ、貴方いま……「こいつ友人いないんだな」って思ったでしょう。

ええそうよ、悪い？ ひととの付き合い方とか知らないわよ。

ずっとひとりだもの。そりゃあ、助けた相手とはお話するけれど、

一言二言ことばを交わして終わりだし。

悪い？ ……べ、別に開き直ってなんか……。

(結界をまたいで接近)

ッん？ な、なによ——えっ……おい、来るなッ近づくなッ！

ほはアッ？！ ななななッぬあッ——おああうえっえええ？！

ななななにす、なにして！ なぜ抱きッ抱き着く！？

……ばッ——距離詰めすぎって言っただけでしょ！？

今までの会話はなんだったのよ！？

おおおお落ちて着け落ちて着け！ ……はあ？ 私が落ち着けと？

いやいやいやいやこんな状態で落ち着けて！？ 阿呆！

離せ——はよう離せ！ 不埒者がッ……下衆！ 外道！ 変態！ 馬鹿！

ぐあッ、い、いけないいけない……これしきの事でまた取り乱すとは……。

ふうう……。

いいからもう離れなさい。ね？ ほら。……は、な、れ、ろ！

……そ、それでいいのよ。……はあ。やれやれだわ……。

何がしたかったのよ、貴方。意味不明よ本当。

……、……はあ。そんな無茶苦茶な屁理屈が通ずると思った？
まったく……。こどもみたいな言い訳ばかりして……。

……ふふっ。貴方も……筋金入りの不器用だという事がよく分かったわ。
澄ました顔して、何よ、貴方もどうせ友人恋人なんていないのでしょう。

……孤高ね……。

ほら、持って来なさい。……何をもって、式神の契約書よ。

あと、何か食べるもの！ これまでの無礼はそれで良しとするから、急いで！
こちら何日も水しか飲んでないのよ、早くしてね！

参懐かしの欠片

「先生。可畏狐を式神にされたそうですね。

……いえ、少し意外でしたので。

【妖狩人（あやかしかりゆうど）】とうたわれた貴方が……。

あの鬼に、情が移りましたか？ ……いえ、申し訳ございません。

……今しがた届いた特上寿司も、奴に……？ ……承知しました」

うう。おなかすいた……。

あやつめ……何時間待っても……ごはん持ってこない……。騙されたんだ……。

ああ……視界がぼーっとしてきた……。

マグロ……サーモン……タイ……タイ……？

キンメダイ……！ 甘海老……ああ……じゅるり……。

（足音）

ッ！ だ、誰……？

えっ。ああ、貴方なの。……ご飯、ご飯は持ってきた？

え、え、うわっ。これ、これ……お、おとお、おすし……？！

おしゅしッ！！ わあああマグロサーモンキンメダイアジエンがわあ！

甘海老は！？ 甘海老はある！？ あった！

これサビつきじゃないよね！？ わさびはちょっと苦手だから――
アッ……。

……。……。

ふん……給仕、仕方ないけれど感謝するわ。

毒でも盛ってなければ良いのだけどもねえ……。

うわッ。なによその顔！ 結果から顔だけ出すな！

ニヤニヤするな！ そんな目で見るな！ 見るなアッ！

クッ……た、食べづらいでしょう！？

ああもう良いわ、やはり漸の情けも施しも現世最悪の穢れよ！

貴方達で勝手に食べてなさいな。私はその、ええと……空気でも食べてるから。

すー……はー……すー……はー……。

ああおいしい。空気おいしいわね。

もうお腹いっぱいになっちゃったわ。だからね、それはいらぬのよ。

……。

えっ、あ……。ああ……。な、なんて美味しそうに食べるのよ……。

貴方ッ感想なんて頭の中で言えば良いでしょう！

何が芳醇よ、何がハーモニ―よ！ ドブみたいな音色でも奏でてろ！

（ぐううゝゝゝ）

ひいう！ ぐ、ぐー、ぐー。もう眠いから寝るわね。

睡眠の邪魔だから出て行って頂戴。夜更かししたのよ。本当に。本当なの！

……。いらぬって言うてるでしょう。

そんな不用意に手を差しだして……手首から先を失いたいのかしら。

鬼は頭をものがれても喰らいつくんだから……。……黙れ小僧！

はあ……本当……ひとつて忠告を聞かないわね。どこまで馬鹿なの……？

うう。分かったわ。貴方の度肝を抜く度胸に免じて……

ほんっと、仕方ないったら……。

……はむっ。……ん……おいひ。おいひい！ なんじゃこりゃあ……

いつものお寿司と違う――なに、なんでこんな、なんなのこれ！

しかもサビ抜きだ……。

……甘海老。甘海老もちょうだい。

あ……、はむっ。んんんぷりぷりっ。この歯ごたえ、たまらない……。

生き返るうう。引いた生気が満ちてくるようだわ……。私、完全復活……。

え、契約書？ そんなもの後でも良いでしょう。私ここから動けないのだし。

ん……ごくりっ。ふう。……ああそういえば、貴方の話をちらりと聞いたの。

見張りが言っていたのだけれど、貴方、名の知れた妖狩りの達人らしいわね。

え？ うふふ。ぺらぺらと喋っていたわよ。

生まれながら親なしで、その能力を買われて漸の戦士として育って……、

様々な組織を行ったり来たり。妖を狩る為の存在として扱われて……。

ふふ。過去を洗いざらい知られている貴方も大変ね……あははは。

まあ、そうね……道理で手強いはずだわ……鬼神を相手に血も流さないとね。

神なんて大した事ないって思った？ ……ふふ。

私は妖としては上位の存在だけれど、神としては未熟だね。

生まれながら母も父も失ったから……神の処世術は学べなかったのよ。

鬼神・可畏狐なんて呼ばれていても……その実、野良の一匹狼のようなものよ。

ちょっとだけ強い妖というだけ。

……私は……今まで築いてきた思い出も経験も、薄っぺらい。

ひと助け、妖助け、それが可畏狐の全て。

何かしてきたようで、実はなんにもしてないの。

したい事だけを積み重ねて、ここまで来てしまったから。

その結果がお尋ね者で、今は漸の囚われ者だなんて、ほんとと呆れかえるわね。

お茶の間の一口噺にもならない……ただの喜劇よ。

……ふふ。どうしてこんな話をしたのか、って顔ね。

少し昔話をしても良い？ ……うん……。

あれは……今年のような酷暑の夏だったわ。

私があてもなく、様々な地方を駆けていたのは知っているでしょう？

当時周っていたのは西の方だったのだけれど、その土地は妖もひとと少なくてね、

争い事なんて起きそうもない、平和を体現化したような田舎町だったわ。

山と森に囲まれて、なんにもなくて……。

そこでね、小さな小さな、でも新築の神社を見つけたの。

……綺麗な女の子が、縁側に座ってたのよ。

……えんがわ……じゅるり……ハッ、ちっちゃがっ、お寿司は関係ないわよ。

えと、それでね。

その子、どこか物憂げで寂しそうで、どこかを見つめながら座ってたの。

すぐに分かったわ。ああこの子は私と同じ……孤独なんだろうなあ、って。

妙な親近感が湧いてね、つい声をかけてしまったの。

奇麗な子だった。その子は、神。

その小ぶりの神社を依り代にした、土地の守り神だったのよ。

他愛ない会話を重ねて、ふたりでぼーっと……群青の空を見上げて……、

ふと……彼女は笑いながらね……。

「懐かしいって感覚……これってさ、不思議なものだよな」って。

何気なく言った言葉かもしれないけれど、でも気づいたの。

この守り神は孤独だけれど、孤独じゃない。私とは違う、ってね。

その子にあって、私にはない何か……それを一瞬、感じてしまった……。

……初めてね。初めてその時だけ、自分の生き方に迷いを抱いたの。

私、何をしているんだろうなあって、ね。

自分で選んだ世界だけれど、過酷な道のりだったけれど……、

誰かを助けて、その時々満足してただけで、結局今は何も残ってない……。

今が良ければ未来なんて……って考えて生きてたのよ。

その守り神の言葉に、私は何も答えられなかったわ。

近く鳴いてる蝉の声が遠くに聞こえて……まるで時間が止まったようで。

その子が見上げている空は、私の目に映るものとは違うんだ。

そんな事を考えて……。

……。……ああ、そうだ。

あの日々はもう、終わったんだなあ。

今は……貴方が目の前にいるものね。

ねえ。貴方は……彼女の言葉をどう思う？

貴方は幼い頃から【妖狩人】として、数多の妖を葬ってきた……。

私を切り裂こうとする貴方の顔。最初は感情のない虫のようだったわ。でも、……私、失神する寸前……もう一度貴方の顔を見たの。

どうしてあんなに寂しそうな顔をしていたの？

……うふ。愚問かしら。

私たち、似てるわよね。

立場はまるつきり逆だけれど、だからこそ同じなのよ。

こうして話してみても、性格も境遇も似たり寄ったりという事が分かったもの。

私たちに、「懐かしい」は……ない。

でも――

……。ん……、私も……そう言おうと思ってた。

これから……ふたりで、「懐かしい」を作っていくでしょう……？

それが、私を捕まえた貴方の道で……。

全てを失って、新たな場所へたどり着いた私の……道。

うふふ。これから宜しくね……貴方♪

肆ひとの歩み

……眩しい。

ああ……暑い。それに緑の匂い。……自然って、美しいわね。

む。仕方ないでしょ。ずうっとあんな狭苦しい場所にいたんだもの。

肌もすっかり色白になってしまったわよ。髪の毛まで、ほら。

……ふふ、元々白髪よ。親譲りなの。この瞳も……そうよ。

ふう……。

ん……なに？

ふえ。き、きれいって――……そ、そう。ありがと。

貴方も、その……す、素敵……よ。

ああもうっ、もどかしいわね！……ニヤニヤするな！ まったく……。

……ねえ。よかったの？

いや、ほら。あの連中と決別してしまったのでしょ。

これからは漸の本来の目的、「ひとと妖の共存」を目指すのよね。

ひととして貴方は……慈愛に満ちた選択をしたのでしょけれど、

連中の価値観からすれば愚の骨頂だし、到底理解出来る行動じゃないもの。

さもすれば奴らは貴方と私の始末を画策するだろうし、

まあ私は元々追われる身だけれど、ひとの貴方がひとに追われるなんて……。

……え……？ ……ふふ。本当……変わってるわね。

でも、うん、そうよね。ひとが、妖が……生きている者が自力で掴んだ幸せを、

愚弄したり否定する権利なんて、誰にもない。

うん。どこまでも付き合ってあげる。それが私の選んだ道だからね。

……とはいえ、ここには長居しない方が良いわね。

どこか遠くへ行きましょうか。……ん……。

そうね……湖。湖に行きたい。うんっ。良い場所を知ってるのよ。

あの景色、貴方にも見せてあげたいな……。

え……ちよ、ちよっと、そんな、手を繋いでだなんて……まるで……うう。

……何を言ってるの！ 私は鬼よ？ 鬼神なのよ？

ひとの手に触れるなんて造作もないッ。だって、ええと、ほらッ、

助けた相手と握手したりだとか……した事あるもん！

……あっ。うあ、……温かい……。ん……。

思い返せば、ひとの体温なんて気に留めた事もなかったなあ。

こんなに……こんなに温かいものだったのね。

それに、とても大きい。ごつごつしてて、傷だらけね……。

……貴方の人生そのものみたい。

うふ。私は妖だから、ほら、傷なんてすぐに癒えてしまうの。

何もない手でしょう？ これもまた……私の人生そのものよ。

……行きましょうか。道のりは長いから、ね。

(湖へ)

ふう。結構歩いたわね……でも、出発地点が思ったより近くてよかったわ。

日が暮れる前について良かった……。

……うん♪ 奇麗でしょう。青々と広大で、何もかも飲み込んでしまいうそう。

……。

時々ね、自分の存在が曖昧になる事があったの。

そんな日はここに足を運んで、ずっと湖面を見つめて過ごしてたのよ。
だって、ほら見て、私が映ってる。まるで映し鏡みたい……。

……私は自分を残す事は出来ないから。死んでしまったら、もう何も……、
私を証明するものは、ないの。

少し寂しいけれど、仕方ない事よね。あはは……。

……ん？ あ、そ、それって……あれだ。

道行くひとが手に持つてる、薄っぺらい不思議な……機械仕掛けの。

貴方も持つていたのね。一体、それは……？

……すまほ……？ っていうの？

お寿司屋さんでもね、皆が持つてるのをよく見かけたわ。

ああそういえば、お寿司を注文するときも似たようなものを使ってたわね。

あつ。もしかしてこれ……ぴっぴってやったら、お寿司出てきたりする……？

えつ。あ、そうなの……？ ……わ、分かってるわよ！

試しに言ってみただけだから！

ぬあつ。く、食いしん坊じゃないもん！ ちょっとお寿司好きなかだけよ！

もおつ。馬鹿にしないでよ。ひとの文明についてはよく知らないのよ。

……へ？ ちょ、ちよつと。なんでそれ、すまほ、こっちに向けるの……。

え、え、なに、何する気？ 怖いんだけど！

(カシャツ)

ひえツ？！ ……な、なにを……？

え……え？ うわつ。私だ。私が映ってる。

これ、写真よね……？ へええつ。こんな事が出来るんだ……すごい。

でも、どうして——あつ。

……も、もう。何よ何よ、急にそんな優しい……変な気持ちになるじゃない。

(カシャツ)

ひよわつ！

(カシャツカシャシャシャシャ(連写))

きやあああああツ！ ぬあツななななツ……！ おどろかさないでよつ。
わ……うあああ、すまほに私がいっぱい……！

……。あ、ありがとう。……照れくさいなあもう……。

ううう。貴方もっ！ 映りなさい！ すまほをよこしなさい！

あつこらつ。抵抗するなツ。ぐううツ、腕ごともぎ取ってやるわよ——

(抱きしめろ！)

ひゃっ……！ あう……このっ……うう、……。

まったく狡いわね……こうして抱きしめれば私がおとなしくなると思って……。

え？ なに、上を見ろつて——

(カシャツ)

ふあ。

あ……、……私たちが映ってる……。ふああ。

……ふふ♪ 仕方ないわね。これで許してあげる……♪

さあほら、早く離れて。もうじき夕刻だけれど、まだ歩けるでしょう？

見せたいものがまだまだたくさんあるのよ。

うーんと、次は……そうね、鴨田山に行きましょう。

神奈川の寂れたところだけれど、知ってる？ ……名前だけ？

ええとね、あの少女のいたところよりはまだ活気があるわよ。

ひとと妖もたくさんいてね、おいしい駄菓子屋さんもあるの。

ああ……あそのチーズおかし、久しく食べてないわね……じゅるり。

あつこの時期ならお祭りもやってるかも……。

焼きそば、焼き鳥……うふふ♪ 早く行きましょう？

……えつ？ そ、そうかな。そんな顔してる……？

貴方こそ、初めて会った時より明るくなったじゃない。

ふふ、何の顔なのかしら。新しい感情ばかりで、まだよく分からないなあ……。

これからたくさん……知っていくのかしら。

……ん♪ ええ、ふたりで、ね♪

(終)